

人間「宮沢賢治」のふるさと(2)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	藤根, 研一
巻/号	46巻4号
掲載ページ	p. 189-192
発行年月	1991年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



人間「宮沢賢治」のふるさと (2)

藤 根 研 一

一 技師「宮沢賢治」—

1. 蛇紋山地の赤き空／雲速やかに過ぎ行きて／
夢死とわらわん田園の／黎明今や果てんとす
3. 立て我が気圏の戦士等よ／暁既に破れしを
今角礫の荒土に／リンデの種をわれ播かん

—花巻農学校黎明行進曲—

賢治が花巻農学校の生徒達に贈ったこの歌は、彼自身が採用を遠慮しなければ花巻農学校校歌になっていたであろう有名な精神歌とともに「農業得業土」としての志の深さを物語るスピリットソングである。

蛇紋山地とは花巻から美しく見える早池峰の意である。夢死は、酔生夢死から来ているのだろうか、この詩句で自分の生き様を重ねて表しているのであろう。今、角礫の荒土——決して豊かではない大地に、私は豊かな心のタネをまくのだという意味にとっていただければよいと思う。

農業と農村の改良のために生涯の情熱のすべてを賭けて戦い尽した賢治は、その学識の深さゆえ、「イーハトヴ」「モリーオ」始め、いろんな場所に独自の命名をした。イーハトヴはイーハトーフ、イーハトーフオ等、いろんな形で使われているが、彼の心象中のドリームランドとしての岩手県の意であり、モリーオは盛岡、センドアートは仙台の意である。

そのなかで有名なものに「イギリス海岸」がある。花巻市を貫流する北上川の凝灰岩質新第3紀泥岩の岸辺を賢治はこう名付けているが、古い人類以前の地球に夢をはせた彼の想像力の豊かさは、地質、土性に明るい「農業得業土」ならではのものである。

「銀河鉄道の夜」では、プリオシン海岸と呼んだこの場所に立てば、北上平野が作られつつあった悠久の地球の偉大さに思いをはせることが出来る。しかし、反面そのロマンにひたりきれぬほど岩手の農業や農村の現実には甘くないという現実につき当たる時、ここはまた「修羅のなぎさ」に変貌するのである。

なみはあおざめ支流はそそぎ

たしかにここは修羅のなぎさ —イギリス海岸の唄—

「農業得業土」、すなわち農業技師というものは、どんな苛酷な厳しい風土のなかでも、確固たる技術と哲学を持ち、有用なる存在として農民とともに戦う存在でなければならない。

ドーバー海峡に洗われるイギリスの海岸の地質に思いを托して命名しながらも、賢治の心の内奥では常に「修羅のなぎさ」であり続けたであろうこの岸辺に立ち、川の流れを見るたびに、ロマンチズムとリアリズムの合流点で、もて遊ばれ続けた感性の豊か過ぎる農業技師の懊悩を、私はそこに見るのである。

表層が近代化された今日でさえ「文化のない創造は不幸であり、創造のない文化は不毛である」という賢治の視点から見れば、彼を死の努力に追いやった、この国の「まっくらな大きなもの」、すなわち潜在意識下には封建遺制たる地頭と名子の意識を色濃く残し、率先して汗を流し心や腕を鍛え対話し創造することのない、因習と階級意識に満ちた不信と悪意の増殖装置たる人間存在は、決してなくなつてはいないのである。岩手県は、刈分小作と名子小作の併存した地帯であり、不幸にも最後まで名子小作を持った地域であった。人間を人間として扱わないほどの格差を兄弟にも持つのが名子小作の特徴であるが、このような小作制度が長い間続いたことが本質として岩手県が開明的でない特徴の核となっている。



第5図 石鳥谷塚の根の肥料設計相談所のパネル

賢治が詩を書き、童話を作り、農民芸術論を説き続けた危機意識の原点には、具体的に緻密な風土に対する知見や思い入れ、それに基づいた人間愛あふれる総合的な創造力が、この国を指導、教育するものの側に不在であり続けたこの国の哲学的な不幸に対して、その現状を農民の側から農民とともに変革したという、創造的感性に満ちあふれる農業技師としての熱い思いが濃厚にあったし、他県に類例のない多様な自然を持つこの地を、貧相にし続ける社会的要因をそこに見出したからに他ならない。

共に汗し泥にまみれながらの技術と芸術の一体的止揚の上に新しいイーハトーヴの農民文化は美しく開花する。彼が無償の肥料設計相談所を開設し、孤立無援の奪闘に汗を流し体を蝕まれつつあった頃、海のむこうでは、フロンティア・スピリットに満ちあふれ、国も州も上げて「スミス・レバー法」(1914年)に基づいた研究、普及教育の不離一体の組織を作り出し、地方に根ざした実証教育という「実践教育力」を最大の農業改革力と位置づけた「農業改良普及制度」が農家や農村に定着し着実に成果を上げつつあったのである。

「改良普及員は、実際の農民であり、同時に科学者、普及者、哲学者であり、その上科学者のことばを語り、かつ、これを農民にわかりやすく説明する親切な友人でなければならない。また自分の住んでいる地方及び農民の事情に精通し、農民の期待と信頼を受けて、昼夜を分かたず自己の任務に没頭し、科学上の新発見を自分の地方に適用する方法を考え出し、かつ、これを実行に移し、更に農民の組織活動を勧め、この組織の改良もできるような人でなければならない」。

改良普及員の基本哲学として草創期を指導したリンゼイ・A・ブラウン博士が語るこのスピリットと地方に密着した「実践教育力」こそが、彼が生涯を賭けて願ひ求め続けた「農業技師」「サイエンチスト」としての一つの理想ではなかったろうかと私は考えるのである。

確固たる技術形成力と根つきの普及指導哲学を持たないがゆえに、政治や時代の風に迎合し、「考え戦える農民や組織の育成」という最大のテーマを見失い、階級意識と区分だけが年々色濃く行政の便利屋的な日本の農業技師達の実態から見れば、強いアメリカ農業を構築した農業技師達は、地方農民のための研究と普及教育が不離一体に存在し、今日に至っているのである。

国際化といわれて久しいが、今ほど「角礫の荒土に

リンデの種をまける」農業振興哲学と技術が必要な時代はない。それを具体的に進める道は、「風土や立地因子に対する的確な知見を有し、創造力あふれる気圏の戦士たる人々を育成確保するしかない」——技師として孤独に戦い尽した賢治は、今も私達にこう呼び続けているのである。

—詩人「宮沢賢治」—

「ティアフル、アイ」涙ぐむ目をして、イーハトーヴの空を見つめる木々の花々、それはこの農業風土の歴史を全身で背負った気圏の戦士として、修羅のように大地と人の心を耕やし続けた農民詩人が力の限り人間の春を求めた果ての心象風景の造型である。

親潮寒流による偏東風(ヤマセ)の卓越がサムサノナツによる冷害を生み、太平洋の高気圧がいすわればヒデリノトキハナミダヲナガス早害となる厳しい気象風土に生まれ育ったものにとって、空は矛盾撞着の最たるものである。

「こんなにも美しく、そして厳しい空が他にあるだろうか」。オリザという南方生まれの主要食糧の生産を通じて、この空を見つめ続けた実感認識は、いつも彼の胸を波立たせ生涯詩人としての感性を覚醒し続けたのである。

この厳しくも多様な気候風土に育った詩人にとって、自らの心を耕やし生きるということは、この空に代表される矛盾撞着を修羅となって統合消化し、より良き人間の道を作ることに他ならなかったのである。

心象のはいいろはがねから／あけびのつるはくもにからまり／のばらのやぶや腐植の湿地／いちめんの詠曲模様(中略)いかりのながさまた青さ／四月の気層のひかりの底を／唾し、はぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ(中略)まことのことばはうしなわれ／雲はちぎれて空をとぶ／あかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ

「春と修羅」という二極分化された心象風景を歌った詩集こそ、この岩手の厳しい農業風土と、そこから導かれる詠曲模様の人間関係の基調をなす「まっくらで巨きなきもの」への詩人としての高らかな闘争宣言でもあったのである。

「のばらのやぶや腐植の湿地」のように増長と高慢、こびとへつらいが蔓延する人間風土のなかで、涙ぐむ心を抱えながら須弥山を目指し修羅として戦う以外、まことの道はないのだ、という農民詩人の心象風景か

らの叫びや祈願は、それゆえ階級と因習にからめとられ、ものいえぬ環境のなかで真摯に生きようとする人々に勇気を与える言葉に満ちている。

彼が修験者のように命をすり減らしながらも修羅としての闘いを放棄しえなかった悲傷は、最大の理解者たる妹「トシ」を失ったことである。

けふのうちに／とほくにいってしまうわたくしのいもうとよ／みぞれがふっておもてはへんにあかるいのだ／(あめゆきとてきてけんじゃ)(中略)

ああとし子／死ぬといういまごろになって／わたくしをいっしょうあかるくするために／こんなにさっぱりした雪のひとわんを／おまえはわたくしにたのんだのだ／ありがとうわたくしのけなげないもうとよ／わたくしもまっすぐすすんでいくから

彼は、この詩「永訣の朝」で妹に約束した通り、まっすぐにまっすぐに進んでいったのである。

彼自身は、明るく快活に振舞いながらも、一生の間「無声慟哭」し続けた詩人のように私には思えるのである。



第6図 賢治記念館前の南斜面花壇

それを顔に出さない克己と利他行の精神が、彼の詩人としての創作の原点となっていた。そしてその心は、常に恵まれない農民にむいていたのである。

どういふものでございませうか／斯ういう角だった石ころだらけの／いっばいすぎなやよもぎの生えてしまった畑を／子供を生みながらまた前のぼろ着物を綴り合わせながら／また炊爨と村の義理首尾とをしながら／一家のあらゆる不満や欲望を負いながら／これら黒いかつぎをした女の人たちが耕すのであります。(中略)

この人達はいったい／牢獄につながれた／たくさん革命家や／不遇におえた芸術家／これら近代的な英

雄たちに／果して比肩しえぬものでございませうか

自然や気象風土との対話から人間の糧たる農産物を作れない人々がもの知り顔で世論をリードし、農民の耕作意欲をなくす時代状況のなかでも、彼は確固として農民の側に立ち、安逸な生きざまを告発し続けるのである。

あっちもこっちも／ひとさわぎおこして／いっばい呑みたいやつらばかりだ／羊歯の葉と雲／世界はそんなにつめたく暗い／けれどもまもなく／そういうやつらは／ひとりで腐って／ひとりで雨に流される／あとはしんしんと青い羊歯ばかり／それが人間の石炭紀であったと／どこかの透明な地質学者が記録するだろう(「政治家」)

農民の耕作意欲とは、民族の創造力の背骨に他ならない。それをないがしろにしては決して「人間の春」はこないだという修羅こそが農民詩人「宮沢賢治」の原点でもある。

—哲人「宮沢賢治」—

方十里 稗貫のみかも 稲熟れて
み祭三日 そらはれわたる
病(いたつき)の ゆゑにもくちん いのちなり
みのりに棄てば うれしからまし

宮沢賢治絶筆の短歌である。死の床まで農作を願い続けた賢治は、死の前日まで重い病を押して栽培指導に応じ、きわめて淡々と死んでいくのである。

病とは病気のことである。病気ゆえにも死んでいくのちである。それを稔りのために捨てられるならばこんなうれしいことはないと言った彼の壮絶にして誠実なる農民と農村への願いと実践を思う時、私は一人の人間として自らの心の襟を正し深く深く頭をたれるのである。

「人間の春」を願い求め続けた実践者の最後の秋は、コバルトブルーの空と豊作の祭りを彼にもたらしてくれたのである。それは修羅として土と人の心を耕やし続けた一人の壮絶にして誠実な魂に対する天の解答のようにさえ私には見えるのである。

当知是処、即是道場、諸仏於此、得三菩提
諸仏於此、転於法輪、諸仏於此、而般涅槃

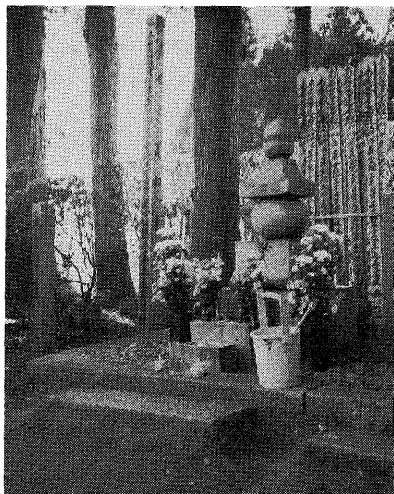
「雨二モマケズ」が記されている黒皮の手帳のなかにあるこの法華經の言葉通り、この稗貫の地を道場として、ここで悟りをひらき、伝え、死んでいくのである。

ともすれば、この地における名家の長男としての境遇から逃がれたいという夢ばかりを見る自分を折伏さ

せるため、生涯何度となく彼はこの言葉をつぶやいたに違いない。その思いこそ、自分の志を地にぬいこもうとした悲壮な哲人としての努力でもあったのである。

芭蕉もここまではこなかった／南部、津軽のうす暗い北限地帯の／大草原と鉾山(かなやま)つづきが／今では陸羽何々号の稲穂にかはり／紅王、国光のりんご畑がひらかれて／明るい幾万町歩が見わたすかぎり／わけても今年は豊年満作／三陸沖から日本海まで／ずっとつづいた秋空が／いかにも緯度の高いやうに／小々硬質な純コバルト性に晴れる／東北の秋は晴れるとなると／ほんとに晴れてまぎれがない／金の牛(べご)こが抗(あな)の中から／地鳴りをさせて鳴くやうな／秋のひびきが天地に満ちる。(高村光太郎「東北の秋」)

人間として誠実に生きる難しさは、今も昔もかわりがない。しかしこの道こそ人と人を真につなぐ誰一の道であることはいうまでもないことである。



第7図 身照寺の賢治の墓

その心の

高さの微塵を知ろうとして生きてきたが、彼こそが、この地が生んだ最大の哲人であろうことは、その評価がいかようになろうともまちがいのない事実であると私は思っている。

——「雨ニモマケズ」の詩は賢者の文学として、賢治の文学の特色を、最も純粋に最も高い精神で打ちだしたものであると私は考えております。何よりも、この詩の中に現われている願いの誠実に私は頭を下げるのであります。それ以上にそういうものになりたいと言った、そういうものに事実賢治がなったというところに一層頭を下げるのであります。

明治以後、われわれは幾多偉大な文学者達をもちました。しかし、その人の墓の前に、本当にへりくだった心になって跪きたいという人を私は賢治以外にもた

ないのであります。鷗外とか漱石とかいう人達は文学者としても、人間としても立派な人でありました。偉人と呼んでいい人でありました。しかし私は鷗外の墓の前にも、漱石の墓の前にも、本当にへりくだった心をもって跪きたいとは考えません。しかし、賢治の墓の前には、私は跪きたい。——

故谷川徹三先生の講演録でもある「宮沢賢治の世界」は、賢治と同世代に生まれ、風土性も認識した上で、彼の世界観を哲学的にとらえ、何度読んでも心にしみる内容となっている。「農」の価値がゆらいでいる。「歴史はくり返す」という視点を持ちながらも、人間の心が年々荒れ地化していく気がしてならない。

そして、それは賢治が生きた時代よりも、手ひどい頽廃を含んでいるようにさえ私には見えるのである。

自己啓発とは、自らの汗で自らの心を耕やしていくことに他ならないが、現代社会ほど、その自律、自助、責任を放棄した“自墮落な寝姿で人をおこす人”が多くなっている時代はあるまいということである。

私も長い間、普及員の仕事をしてきたが、人間信頼の基本は、隣県秋田の農民指導者「石川理紀之助」がいうごとく「寝ていて人をおこすこと勿れ」の精神と行動の上になり立つものであると思っているが、現代の農民、農村指導者は、私を含めその基本要件を、きれいさっぱり捨てている気がしてならないのである。

手は熱く足はなゆれど／われはこれ塔建つもの／滑り来し時間の軸の／をちこちに美ゆくも成りて／燎燎と暗をてらせる／その塔のすがたかしこし／むさぼりて厭かぬ渠ゆえ／いざここに一基をなさん／正しくて愛しきひとゆえ／いざさらに一を加えん

「手熱く足なゆれど」)

宮沢賢治を慕い、63歳という高齢にもかかわらず、自己流謫の地を花巻に定め、イーハトーヴの厳しい自然に全身をさらすことにより、賢治の壮絶にして誠実な魂の根源にふれ、「岩手の人」を始め数々の詩を残した彫刻家、詩人「高村光太郎」の実践の重味を人間として理解しなければならぬ。いつの時代でも、「言うは易く行はかたし」なのである。

自墮落で深求心の薄い魂を鼓舞してくれる哲人賢治の思いをしるす、彼が歩いた山や川や石碑に何度もふれえる幸せに感謝するとともに、それぞれのイーハトーヴを作る人々の源流が人間賢治の精神の立つ所であってくださることを、私は心から切に願うのみである。

(岩手県農産物改良種苗センター園芸部長)